冥の照覧

—興福寺の僧侶からみた神仏習合の世界—

法相宗大本山興福寺録事補のザイレ暁映師

火曜午餐会・10月第２例会は公開講演会として、15日13時から当部５階大会議室で開催した。講師に法相宗大本山興福寺録事補のザイレ暁映師を招き「冥の照覧—興福寺の僧侶からみた神仏習合の世界—」をテーマに語って頂いた。ザイレ師は神仏習合について「神仏習合の特徴は、何らかの経典をみて説かれたものではなく、人の感覚、感得、あるいは夢告によって展開する考え方。ですから人によっては神様と仏様の関係が変わってもおかしくはない」と語った。講演要旨は次の通り。

興福寺の僧侶の日々の生活の中には、今でも神仏習合が元気に生きている。

明治に入り、神仏判然（神仏分離）令が発布され、無理やり神道の神様と、仏教の仏様を分けようとした。分けるだけではなく、仏教を批判、廃仏毀釈運動も起こった。このことは、今でも日本人にとっては不自然だと感じている。

春日社（春日大社）の創建と祭神

768年、春日大社は藤原家の氏社として三笠山の麓に建てられた。第一殿には鹿島の神様「武甕槌命（たけみかづちのみこと）」、第二殿は「経津主命（ふつぬしのみこと）」を祀られた。元々は、東国の最も力のある神様をお迎えし藤原家の集合寺とした。そして第三殿の「天児屋根命（あめのこやねのみこと）」と第四殿「比売神（ひめがみ）」は、古来藤原家と関係のある神様をお祀りした。所謂、春日社の五所明神と呼ばれるのは、この四柱の神様と、最も大きな摂社である若宮社「天押雲根命（あめのおしくもねのみこと）」のこと。

興福寺と春日社は、何れも藤原氏と関係がある。藤原家の地位が向上するにつれて、勢力が増してくる。そして都が平城京を離れて平安京に移ると、興福寺が神社を経営管理することになり、春日社興福寺という一つの組織になった。この一体化を描かれているのが「春日社曼荼羅」。春日の風景、興福寺の伽藍、そして安置されている仏様が描かれている。

本地垂迹（ほんぢすいじゃく）の世界

我々愚か者である衆生の救済のために、仏・菩薩（＝本地）が衆生の能力に合わせて姿を変えて出現したもの（＝垂迹）が日本の神様。つまり日本人にわかり易く、親しみ易いように形を変えて現れてきたということです。特に鎌倉時代に入ると、このような考え方が日本全国に急速に広まり、本地仏が置かれるようになった。

春日五所明神の本地仏は、一殿には「釈迦如来」、二殿には「薬師如来」、三殿は「地蔵菩薩」、四殿には「十一面観音」、そして若宮には「文殊菩薩」。

しかし後に、一殿に関しては、「お釈迦様」ではなく「不空羂索観音」だという別の説が出てきた。この観音は興福寺の南円堂の本尊で、春日社の一殿「武甕槌命」の本地仏。仏像の形をしているが実は春日の神様だということ。また堂内の本尊前に春日赤童子が祀られていて、南円堂は他の諸堂よりも春日信仰と密接している。

神仏習合の特徴は、何らかの経典をみて説かれたものではなく、人の感覚、感得、あるいは夢告によって展開する考え方。ですから、人によっては神様と仏様の関係が変わってもおかしくはない。春日社と興福寺の間に生まれてくる本地垂迹の信仰を具体的に表した「春日曼荼羅」も、殆どは社景があり本地仏が出てくるが、神様だけや、お寺のみを画いている場合もある。

興福寺の得度

興福寺では得度の際、春日の神様の許可が必要なので、まず春日にお参りをする。これは鎌倉時代から変わっていない。

そして修行は、諸堂参拝をする。毎朝興福寺の各お堂の前で読経を行う。ただ、南円堂に安置されている仏像は神様なので、読経後は春日の方に振り向き二礼二拍する。南円堂の基壇の上は興福寺の境内の中の遥拝所です。

得度後の大きな修行は、「四度加行（しどけぎょう）」。これは真言密教の修行で毎日護摩を焚き100日籠る。この護摩修行は一日三回行うが一番厳しい。一回で５時間かかるので15時間座る。この修行を終えて正式なお坊さんになる。

冥の照覧

我々の新年は１月２日。この日に興福寺の最初の年中行事「社参式」をお寺ではなく春日大社で行う。この日は春日大社の日々、神様にお供えをする最初の日である「日供始（にっくはじめ）」でもある。宮司、神官と一緒にお参りをし、読経を行う。

神様と仏・菩薩は、私たちからすれば非常に具体的な存在で、感情的に感じる。春日大社の本殿で読経するが、一度もきれいに読経したことがない。読経を始めると脈が速くなり、誰かに肩を押されているような感覚になる。所謂、「冥の照覧（みょうのしょうらん）」で、目に見えないものがすべての行動を見ているという感覚がある。

春日大社の客殿から見上げると「祭神如神在」という額がある。元々は論語からの引用文で、神を祀るには『神在ますが如くす』。神が在ると思えば神は在る、在ないと思えば神は在ない、ということ。春日大社に行き神様を感じるのではなく、気付かないうちに神様は心の中に付き添って見続けている。守り半分、戒め半分で日々の修行を支えてくださっている。